

## Charles Miller Fisher : 偉大な観察者\*

福武 敏夫\*\*

(神経治療 32 : 216-217, 2015)

## はじめに

Charles Miller Fisher (CMF) は脳卒中学の創始者であるとともに、神経学的観察の偉大なる達人であった。CMF はカナダで医師になった直後に英国海軍の軍医になり、乗船した武装商船が沈没させられて3.5年間ドイツの捕虜収容所に抑留された。その間に捕虜の病歴を記録するとともに、ドイツ語をマスターした。帰国後Penfieldのいたモントリオール神経研究所などで研修し、探究心を認められてフェローとして採用された。3年後、推薦でAdamsのいたボストン市民病院に着任した。

## I. 心原性塞栓症を提唱

CMFは着任直後から全ての脳を切り出す担当になった。伝統的な切り出しでは脳底動脈網の連続的な検索が不可能であったが、3ヵ月後のある日、9つの脳の中の3つの出血性大梗塞例を切り出す前に、主幹動脈を観察して血栓が存在しないことを発見した。カルテから3例とも心房細動の既往があることを見出し、心臓からの塞栓によって梗塞をきたし、塞栓は溶けたか移動していき、再開通後に出血性変化をきたしたと考えた。しかし、当時は血栓のない梗塞は血管攣縮によると堅く信じられており、その論文は却下され、40年後になって同じ論文が日の目をみた。

## II. 脳梗塞の機序別に治療法を提唱

心原性塞栓の論文の却下後、左片麻痺のある患者の、発症前に右眼視力の喪失があったというコメントがきっかけになり、CMFは内頸動脈に研究テーマをシフトさせた。眼症状の側の内頸動脈の閉塞を想定して精力的に剖検時に頸動脈の検索を進め、その考えを証明した。これを基に当初は低灌流によるTIAを提唱し、後にA-to-A機序も提唱した。その後、CMFは剖検脳を連続切片で観察することで、1,000余例中に1つ以上ラクナを有する例が11%あることを見出し、カ

ルテ検索と家庭医へ問い合わせにより、ラクナの80%が高血圧により生じるが、残りの20%は原因不明とした。さらに、詳細な臨床観察と病理所見の対応から多くのラクナ症候群を記載した。ラクナ梗塞の機序についても詳細な剖検観察から、①穿通枝のアテローム+血栓、②母動脈の入口部のアテローム(現在の分枝アテローム病)、③母動脈の動脈壁解離、④著明な高血圧に関連したリポヒアリノーシス、⑤微小塞栓を挙げた。

CMFの偉大さは、単に脳梗塞機序の解明だけでなく、心原性塞栓症への抗凝固療法、内頸動脈病変への抗血小板療法や頸動脈内膜剥離術などを開拓していったことにある。

## III. General Neurologyにも貢献

CMFはGeneral Neurologyの多くの側面にも、特に症候学的に貢献した。正常圧水頭症、一過性全健忘、片頭痛、Miller Fisher症候群などである。脳卒中学への膨大な貢献にも拘わらず、その業績は常識として脳卒中診療の中に溶け込んでしまってCMFの名前は基本的なラクナ症候群に言及される時以外には忘れられているが、後にMiller Fisher症候群と呼ばれる病態に名を残した。その発見時頃、運動失調と眼筋麻痺という主徴に対して同僚がその当時の最高の検査である椎骨動脈撮影を主張したのを退け、たった3例の経験に基づいて、運動麻痺がないにも拘わらずGuillain-Barré症候群の亜型であることを見抜いて論文化したのである。

## IV. 神経学領域の拡大方向を示唆

CMFは晩年になって、その症候学的興味を神経学の主戦場と思われてきた運動や感覚の領域から、人間行動のもっと複雑な領域に拡げていった。それはデメンチア患者にみられる多様な症候、高次脳機能、倦怠感、せん妄、ヒステリーなどに及んでいる。神経学の進むべき1つの主要な方向を示唆したものといえる。

\* Charles Miller Fisher : The Grandmaster of Neurological Observation.

\*\* 亀田メディカルセンター神経内科 Toshio FUKUTAKE : Department of Neurology, Kameda Medical Center

おわりに

CaplanによってまとめられたCMFによる17の教訓の最後に“Maintain a lively interest in patients as people”が挙げられている。これがCMFの観察眼を支えていた基本的精神と思われる。興味がなければ観察はできず、また観察こそが患者への貢献への途であることをCMFの生涯は示して

いる。

文 献

本講演の内容は“チャールズ ミラー フィッシャー：偉大なる観察者”と題してBrain Nerve 2014 ; 66 (11) : 1317-1325に掲載しています。